

[1]

ある日お風呂から部屋に帰ってくると、私の使用後ブラをオカズに体をヒクヒクいわせながら潮吹きオナニーしている妹を見つけてしまいました。

「だって谷間の汗の匂いがくんかくんか……たまんないくんかくんか」

嗅ぐか喋るかどっちかにしろと言ってやりたかったですが、そもそも姉のブラをオカズにオナニーしている時点でどうかしていました。

[2]

「きよ、今日はお姉ちゃん、おっぱい手伝ってよ」

それ以来、私は妹の麻由のオナニーを手伝うようになっていました。いや、二人でやってる時点でこれはセックスなんじゃないのだろうかと思うのですが、まあそれはただの言葉の違いに過ぎないので考えないようにしておきます。そもそも、私たちは姉妹で、女同士……セックスという『性』という言葉より、もっと身近で自然な言葉の方が合っていると思います。

「あふ……お姉ちゃんのお口の中、乳首あったかくなつて……しゅきい♡」

さっそく麻由の声がとろけ始めます。

私はこの小さいおっぱいが大好きでした。小さいのにしっかりとした弾力はあるし、左胸を触る時はドキドキしているのが直に伝わってくるからです。だから、麻由の乳首は左の方が少しだけ色素が薄くなつていたりします。

「また、左胸ばっか、んひっ♡」

「だって、麻由の心臓、触って触って、ねだるんだもん。ご期待に答えてあげなきゃ」

しっかりとコリコリになった豆乳首を摘むと、心拍は嬉しそうに跳ね上がった。

「んあうっ！ あっ、あっ、アッ！」

乳首だけでこんなに反応しちゃうなんて、うらやましい体です。どこかでおっぱいは小さい方が感じやすいと聞いたことがあるのですが、あれは本当だったのでしょうか。

「ね、ねえ、お姉ちゃん……あたし、おま○こスイッチ、入っちゃったの。入れていい？ 指、入れていい？」

麻由はオナニーでさえ私に許しを乞うのを忘れません。私の目を使って興奮している意識があるからでしょう。そういう律儀なところが、たま

らなく愛おしくなっています。

「いいよ。麻由の好きだけグチュグチュしちゃういな」

「やったあ！ しゅるのお！ お姉ちゃんの前で、くぱくぱおま〇こ広げて、グチュグチュしちゃうのお！」

見せつけるような豪快なおナニー。ここをこうすると良くなれるのかと、私の方が妹に勉強させられてしまうぐらいでした。

「どんだけ普段からいじつてたの？ ビラビラ、こんなに黒くして、恥ずかしいわい？ お姉ちゃんは、妹がこんなま〇こしてて、ちょー恥ずかしいんですけど」

妹は蔑まれることが好きみたいなので、私は思ったことに少しだけ悪意を盛って罵ってあげます。

「オナニーだけでこんなにならなくなった淫乱妹ま〇こ、お姉ちゃんもつとびろんびろんの醜いま〇こにしてください♡」

ん？ と、その黒い陰唇を唇で挟んで伸ばしてやると、麻由はおしりを浮かせて悦びます。
脚をかつぴらいておしりを振る、あまりにも情けなすぎるがに股踊りを披露してくれます。まるで、私の口を使って、自分で陰唇を伸ばすように。この光景だけで、当分の間オカズには困らないだろうという卑猥さでした。

「んばあ……うっわあすっごい長い糸引いちゃった……ぺろっ……んは、生の妹マン汁、お姉ちゃんに味わわれちゃってるよ？」

伸ばした陰唇をぽちんと離して、唇についた愛液を舌なめずりして見せます。恥ずかしい汁を味わわれていることを知ると、麻由はどうとうオナニー本気モードに突入しました。

「んほおおおお！ お姉ちゃんに、愛液の味、知られちゃいましたあ♡」

左手をおしり側からまわして膣中を、前から右手でクリトリスを欲張りにグチュグチュと弄り倒し、派手な音を繰り返して見せます。

「あっは、すっごいあさましいおナニー♪ ほらほら、行ってごらん？ すっかりハマっちゃったんでしょ？ お姉ちゃんに見られて、す・る・の」

「はい、しゅきでしゅ！ お姉ちゃんの前で、おナリゅの、しゅきい！ お姉ちゃんの前で、だらしな妹アクメ、キメちゃいます！ イク、イクイク、イクイクイクイクううううううううっ！！」

プシャー……ううううううううううっ！

手馴れた指の動きで、潮吹きとアクメを同時に味わっていました。年上の私でも、こんな凄いイキ方、した事ありません。どうして、妹だけこんなふうに着ちゃったんでしょう。顔の横にしゃがみこんで、イキ顔を存分に見下してあげます。

「お、お姉ちゃん、見られ、て……イグの、もう、どまん、い……♡」

自分の潮にまみれてピチピチと身体を跳ねさせ、完全に打ち上げられた魚状態でした。
すっかり、私の毎日の慰みものになってしまった妹ですが、本人も満足げなので良しとしておきます♡

「お姉ちゃんの下着をお下がりさせてもらうことが、あたしの夢だったのに！」

そんな関係が続けて数ヶ月後のある日、とうとうぺったんこな妹もブラジャーを付けなさいとお母さんに言われたらしいのですが。

「仕方ないじゃない。私は急にボンって大きくなったんだから。パンツだけで我慢しなさい」

「パンツだけじゃ物足りないもん！」

物足りないって、ナニかに使う気が満々でした。

「元はと言えば、お姉ちゃんのおっぱいが大きいせいだよ」

完全に八つ当たりです。

「せ、責任はお姉ちゃんがしっかりとってよね」

「どう責任を取れと？」

「だから！ こういうこと！」

麻由は私の手を掴むと、そのまま自分のちっぱいの上に乗せて擦りつけました。

「あたしのおっぱい、お姉ちゃんのブラに合うまで、しっかりと育ててよね」

【続く】